



フレールベル自傳 (第一回)

(マイニンゲン大公に宛てたる書翰) 倉橋惣三 譯

一、出生

私は一七八二年四月二十一日シユワルツブルグ、ルードルスタツド小國のチューリンギヤ森林地方なるオーベルワイスパツハ村で生れた。

私の父は其地方に於ける主僧即ち牧師でありました。(父はヨハン、ヤコツプ、フレールベルと言つて舊派のルーテル新教會に屬してゐましたが一八〇二年に亡くなりました。)

私は惱ましいいこせこせした境遇に身を處して、人生の苦闘の中に早くから捲込まれて了ひました。そして淺い經驗や乏しい教育で種々と思ひ煩ひました。

私が生れると間も無く母は漸次弱つて行きました。そして九ヶ月の間私に添乳して身罷つて了ひました。母の死は私に取つて一大打撃でありました。それは私の周圍の人々や私の成育上に大なる影響を及ぼしました。母の死は私の全生涯に亘る命數を多少固定したやうに考へられます。

六七の村々に散在してゐる五千の人々を救濟するのは、係つて悉く父の上にあります。この仕事は牧師としての職責を完うすることに就て道念の固かつた私の父の如き活動的な人にさへ大變骨の折れることでした。屢々勤行する様になつてからは尙更さうでした。

この他私の父は大きな新教會の建物たてものを管理することを引受けて家庭や子供等からは漸次離れて行きました。

私は召使の手に任せられました。けれども父が自分の仕事に夢中になつてゐたものですから召使は私よりも兄達の世話ばかりしてゐました。併しこの事は私に取つては勿怪もつりの幸なのでした。この事は後に起つて來る事柄と共に、家族の人々殊に現今でも私の生涯に大關係のある兄弟に對して、深い友愛心を抱く原因となつたらしいのです。

私の父は村の牧師としては非常に評判も善かつたし、學識もあり經驗もあり不斷の活動家でありました。けれども私は幼年期

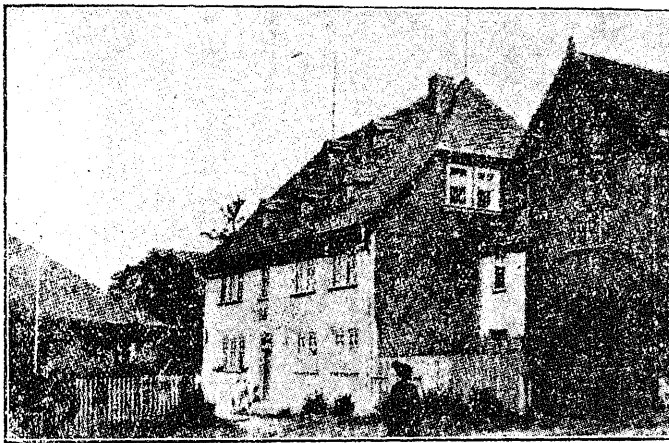
に於て父から離れてゐた結果、生涯父とは親まな
い様になつて了ひました。

斯くて私は母が無かつたと共に實際は父もなかつたと同様です。

二、第二の母

斯うした事情の下もとに私は四歳になりました。私の父は再び妻を娶りました。私には第二の母が出來た譯わけなのです。

私の心はこの時母の愛——親らしい愛——の缺乏を深く感じてゐたに違ひありません。何故なぜならば最早もつ四歳にもなつてそろ／＼物心がつき始めからなのです。



所場の生誕ルベール

私は新來の母に溢るゝばかりの純なる感情と敬けい虔けんなる愛とを以て事へたことを記憶してゐます。

斯うした心掛は私を幸福にし、私の天分を發達させ、私の心力を強くして行きました。何故ならば繼母は私の愛に對して優しく報いてくれたからです。併しながら此の幸福は長續きをしませんでした。間もなく私の繼母は自分の腹を痛めて一人の男の子を贏得けました。而してそれからといふものは繼母の愛は全く私を離れてその實子の上に移つて行きました。そして面倒を見て貰はれないばかりでなく、口汚く罵られたり虐待されたりする様になつたのです。私はまつたく頼りない心持を抱かされる様になつて了ひました。

私はこゝで是等の事情を記さなければなりません。それも詳しく述べる必要があると思ひます。何故ならば私が幼くして自己を觀察したり批評したりする性癖を持つに至つた事や、又幼くして他人との友誼を斷つに至つたことの主なる原因が是等の事情の内に潜んでゐると思ふからなのです。

繼母に子供が出來てから間もなく、やつと幼年

期に入つたばかりの私にむかつて話し掛けるのに、思やりのある親み深い「坊や」といふ言葉を使ふのを止めて了ひました。そして第三人稱を以て私を呼ぶ様になりました。そしてこの三人稱の「あの子」なる呼び方で呼ばれると、呼ばれた者は親み難い疎々しい感じを與へられるものなのです。斯くて繼母と私との間には越ゆべからざる大なる溝渠が出來て了ひました。

私は既に全く孤獨を感じ私の胸は悲みを以て満たされて了ひました。

心の卑しい人々が、此の時の私の感情や心持に乗じて、私を繼母から背かせ様と試みました。併し人情から云つても道理から云つても开廢事は出來る筈のものではありません、私は佛然として是等の人々に反感を抱き、以後は成丈是等の人々を避ける様に努めました。

斯くて私は幼年期から高尚な清純な内的生活を認識する様になり、全生涯に通ずる適當な自覺と

誇るに足るべき道徳上の諸徳との基礎を得ました。

三、内氣な子

諸の誘惑が時々やつて來ました、そして其度毎に私は苦みました。私は極く詰らぬ事しか出來ない人間であると思はれ、尙その上私は卑しい行爲をする者であるといふ様に決められて了ひました。人々は私を斯く品評して了つて、其品評の妥當を缺く事や不眞實なる事に就ては尠^{すく}も考へない様子でした。

そこで私は少年期の初期を一人淋しく沈み勝ちに暮す様になり、四圍の事情に反對して自己に就て考へたり、内部意識を研究したりする様になつて行きました。それから又両親の家の位置は私の人格の構成及び發展に關して著しい影響を與へました私の家は他の建物や石牆や籬や柵に依つて密接に取圍まれ、そして其上尙外庭や圍場や菜圃に依つて圍まれてゐました。私は是等を越えて外へ

行く事は禁せられてゐました。

住居の左右の建物と、前にある大きな教會堂と、後の小高い丘の上に廣がつてゐる傾斜原とを除いては他に眺める物とはありませんでした。永い間私は晴々する様な景色も眺めずに暮らしてゐたのです。併し私は常に頭の上の空を仰ぐ事を忘れませんでした。高原國では空は多く透明で輝いて居りました。そして清い新しい微風は身のまわりに戦いて居りました。あの透明な空と清純な空氣とが與へて呉れた印象は今でも生々と私の心の内に残つてゐます。

私の知解は斯ういふ譯^{わけ}で極く卑近な物象にのみ限られてゐました。

しかも、若木や花を持つた自然界は私の見たり理解したりする事の出來る範圍で直ちに私の觀察や省察の對象となりました。

私は間もなく父の道樂であつた園藝の作業を手助けしました。そして是が爲め私は多くの不易の

覺りを得ました。就中自然界に於ける眞の生命の自覺を私は一番痛切に感じました。私は後に私の記述を此點に向つて進めて行きませう。

當時の私達の家庭生活は私に冥想と反省の機會を度々與へました。

家内の事は常に改良に改良を重ねられて居りました。兩親ともに極端に活動心に富んでゐて、物ごと秩序立つてゐるのを喜び、働ける丈働いて住居を改善しやうと決心して居りました。

私も自分に出来る事は何でもして兩親を助けねばなりませんでした。これがため間もなく私は氣力も確固しつかりして來たし經驗も増して來たといふ事が自分で分りました。

氣力と經驗の増すにつれて、私は遊戯をしたり兩親の手傳ひをしたりすることは、却々價値のあるものであるといふ様なことを悟りました。

四、家庭の感化

自然を友の晴れやかな生活と外面的な家庭生活

の事は暫く置いて、私の家全體や家族の者に關する内輪の模様を記して見ませう。

私の父は舊派の神學者で信仰を智識や科學より貴いものとしてゐたのです。而かも尙父は時勢には遅れない様に努めてゐました。それで父は自分でいゝと思つた雜誌を二三種取つて甚とん麼記事が出てゐるかと思入りに調べてゐました。これあるがために我家の人々がしてゐた様な古風な眞面目な基督教的な生活も尠すくならず高められ開發さるゝのでありました。

毎日朝と晩——御祈禱をする日曜日でも——平凡な宗教禮拜のために家族の者は残らず集りました。清い冥想に耽り樂む時ゾリコーフェルやヘルメスやアングールやスツルム等は私達の思ひを私達の内心の核の上に轉じさせ、私達の身内の靈的生活を鼓舞し開展し崛起させました。

斯くて私の生活は早くから自然の感化、有用な工作の感化、宗教的感情の感化等を享受しました。

即ち各人類に通ずる原始的な自然的な傾向が、幼芽として私にも優しく養はれてゐたといつた方が面白いと思ひます。

私は後に説く所の人の性質に就ての私の意見に關し、又私の唯一の天職を説明するために、私は其頃深い感激を以て、善良にして勇敢なる人にならうと幾度も決心したことを記さねばなりません。併し私の此の確固たる内心の決意は、外面に現れた私の生活とは著しい相違を示して居りました。

私は若々しい勢力に充實し意氣揚々として居りました。そしてその元氣を如何したら適當に調節して行けるかといふことを知りませんでした。私はこの調節の度を缺いた爲めにあらゆる困難に遭遇しました。

私は自分の周圍の物象を調査し理解するためには淺慕にもそれらの物象に向つて屢々破壊を試みました。

五、女學校の生徒

私の父は餘り多くの仕事を持つてゐた爲めに自身で私を教育する暇はありませんでした。且又父は私に一度本を讀ませてみて恐しく骨を折つた経験があるので、私を教へるのに厭氣がさしてゐたのであります。これが爲め讀書は私に取つて非常に難事となつて了ひました。

本が讀める様になると私は村の學校へ上げられました。

父が村の學校長等即ち宗教學校長と女學校長とに親しく其の學校の模様を聞いたり、又夫等の學校の教育の成績等を判断したりした結果、私は女學校へ入れられることになりました。

此の選擇は校内に横溢してゐた清麗、靜謐、理性、秩序のために私の内的資性の發達の上に異常な影響を及ぼしました。否一步を進めていふならば、私の様な子供には女學校が丁度相當だつたのです、これを證するために私がこの學校へ入學した當時のことを書いて見ませう。

當時は教會と學校とは一般に緊密な相互關係を保つてゐました。私の入學した女學校も矢張教會と關係がありました。學校の生徒は教會に於て特別の席を供給されて居りました。生徒は教會に出席を強ゐられるのみならず、特に設けられた月曜日の課業時間には前日祈禱會に出席した證として、牧師が説教に用ゐられた聖書の一くさりを教師の前へ出て暗誦させられるのであります。

是等の諸章中兒童に最も適當と思はれる一章が小さい生徒の暗誦の材料となりました。これが爲めに上級生の一人が一週の間毎日時間を限つて小さい生徒に一句づゝ繰返してやらねばなりません。小さい生徒等は起立して一句宛上級生の跡を跟いで、全部空で覚えて了ふまでは鸚鵡返しをさせられるのであります。

私は月曜日に入學しました。その週の暗誦用に選ばれたのは「爾曹、先づ神の國を求むべし」の一章でありました。私は毎日謐靜な莊重な幾分か

單調な子供等の聲で繰返さるゝ是等の言葉を聞きました。先づ一人の子供が云つて次に全級の兒童がそれについて唱へるのであります。

この暗誦に用ゐられた經句位、私に強い印象を與へたものは前後に絶無でありました。實際その印象は、當時特殊な調子と呼び方で語られた一語一語を、今でも心の内に生々と思ひ浮べる事が出来る位強く且つ永久的であります。そしてこの事は今から數へれば早や四十年許も昔の事になつてゐます。當時の單純な少年の心もこの一語がその生命の基礎となり救濟になるだらうと思つたに違ひありません。又この一語は少年の心に後年活動努力の人に不撓の勇と提進的、常念的、欣然たる犠牲の源泉とを附與するものであるといふ確信を抱かせたに違ひありません。要するに其學校へ私が入學したのは高級な靈的生活に於ける私の誕生であつたのであります。